

〔書評〕

# 原田信之著『隠徳いんとくのひじり玄賓僧都げんぴんそうずの伝説』

松 本 孝 三

本書は、南都法相宗興福寺の碩学として知られた玄賓に関する伝承研究である。玄賓という名を評者も学生時代、仏教説話集などですでに知っていた。遁世者の理想として名利を離れ清貧に生きたという聖僧の姿に、何とも不思議な魅力を感じたものである。ところで、原田氏にはすでに『今昔物語集』の成立圏について、仏教教理・文献説話の精緻な検討から南都法相系成立説を主張した高著『今昔物語集南都成立と唯識学』（平成十七年、勉誠出版）がある。しかるに本書は、興福寺高僧としての玄賓の教学の業績や仏教説話集の逸話を追うのではなく、「伝説」という文字通り玄賓に関わる在地の口頭伝承の地道な実地踏査を中心に据え、そこに仏教説話集や在地の地誌、寺院縁起を対比させ、逐条的且つ実証的に玄賓伝説を分析していくのである。そこには民間伝承研究を一方のライフワークとしてきた氏の確たる研究手法があるのであった。まずは本書の目次を示しておこう。

## 備中国（岡山県）編

第一章 備中国における玄賓生誕地伝説と臍帯寺

第二章 備中国湯川寺における玄賓僧都伝説

第三集 新見市の玄賓僧都伝説―湯川寺・大椿寺・四王寺―

第四集 「湯川寺縁起」と玄賓僧都伝説

第五集 玄賓僧都伝説と四王寺の文物

第六集 高梁市中井町の玄賓僧都伝説―定光寺・光林寺・柴倉神社―

第七章 備中国における玄賓僧都伝説の諸相―「哲多郡」の意味するもの―

第八章 備中国における玄賓終焉地伝説―大通寺・山野神社―

## 大和国（奈良県）・伯耆国（鳥取県）編

第一章 大和国三輪の玄賓僧都伝説―大神神社・玄賓庵―

第二章 伯耆国の玄賓僧都伝説と阿弥陀寺

序章 玄賓僧都伝説の魅力と意味

「序章」において氏は本書の意図を、「これまで、玄賓に関して、文献説話や伝記類に関する研究は行われてきたが、伝承地で語られてきた「伝説」を研究するものにはなかった。本書では、これまでほとんど研究されることのなかった玄賓僧都伝説に焦点をあてて研究を行った」と述べる。しかも玄賓が「口頭伝承の世界ではいまだに生き生きと語られている」というのである。このことは民間説話研究に新しい視界を切り開くものとして、その意義は大きいと思われる。

序章で原田氏は本書全体の内容を包括的に述べ、読者の理解に資する。文献上は河内国に生まれたとされるが、隠遁したはずの備中国での消息を記す文献説話がほとんどない玄賓について、本書の大部分を割いた備中における玄賓伝説の聞き取りから、まずはその伝承分布を大きく「生誕地伝承圏」（旧北房町上水田小殿の地名「高僧屋敷」を中心とする地域）、「隠遁地伝承圏」（新見市の湯川寺や旧哲多郡の大椿寺・四王寺などを中心とする地域）、「終焉地伝承圏」（矢掛町の地名「僧都」を中心とする地域）の三つの伝承圏に分類する。そして、湯川寺伝承圏を核として生誕地伝承圏や終焉地伝承圏が成立していることを想定するのである。しかもそれは備中国に存在した古代における郡司の政庁である三か所の郡家と合致すると指摘する。このような見通しは綿密なフィールドワークを通して初めて見えて来るものであろう。氏の言うように、実像はともかく、伝承地周辺の人々が玄賓をどのように捉え受け入れてきたのかをうかがう上でも、また文献資料

の間隙を埋めるものとしても重要である。

「備中国（岡山県）編」の第一章から第三章では自ら聞き取った二十九もの伝承事例を掲げて具体的な伝承の考察を行う。第一章では現在の真庭市上水田小殿（旧英賀郡水田）の玄賓生誕地伝説について、誕生に由来する「高僧屋敷」の地名が残されており、その近くには玄賓の母親が臍の緒を納めたと伝える広大山臍帯寺があるという。当寺は行基開基とされ、三十三世住職・英学が江戸末期から明治初期の土地の伝承をまとめたとされる「広大山縁起」には、玄賓が十三カ月で誕生したことや阿賀郡湯川に隠遁後、当地へ登山の折、鹿を牛に変えて田畑を耕し、戯れに「山田もる僧都の身こそ」の歌を詠んだと記されている。そこには明らかに、在地の人々による玄賓誕生にかかわる奇瑞や、常人ならざる行為を玄賓の伝承歌によって顕彰する姿勢がうかがえるよう。原田氏は地誌類の分析から、玄賓の臍帯奉納伝説がすでに享保年間に広まっていたと見ている。

第二章は玄賓が隠遁したとされる新見市の湯川寺近辺の伝説を取り上げる。そこでは全国的に知られる弘法大師伝承との交渉や昔話「長柄の人柱」との関わりが指摘されている。あるいは玄賓が湯川寺を去るに当たって「朝日長者」埋蔵金伝説などとの関連も見られるが、それは精力的に各地に寺院を建立して民のために生き、天皇の厚い信頼を得て毎年綿布などの下賜があったゆえに生まれた伝説ではないかという。ただ、これなどは類型的なモチーフであるだけに、やや深読みの感も否めないが、玄賓なる人物

がこれほどまでに当地方で親しまれ、伝説として語られていることは驚きである。また、桓武天皇に薬石を献上したとする石鍾乳採取伝説も備中国の鍾乳石が宮中で使用された事実や地誌類の記述などから、玄賓の隠遁地選択に影響を与えたのではと推測する。文献資料のみならず、こういった口頭伝承を突き合せての読み込みからは、何かしら新しい玄賓像が見出せそうでもある。

第三章も第二章を承けて新見市の玄賓隱徳伝説を追う。前章の「カワニナに尻が無いわけ」や大坂の火事を鎮火させる話などは、昭和の初めに湯川寺にいた僧侶が、新見へ行った帰りに時々話者宅に立ち寄って語っていたものという。さらに氏の調査の手は湯川寺周辺だけでなく、玄賓開基を伝える同市の龍華山大椿寺や伝医山四王寺に及び、大椿寺にまつわる伝説を示しつつ、その一方で、門前の石碑の略縁起や、明和三年の火災の後、中興の祖とされる八世龍岳が再建のために記した「大殿建勸化之序」によつて、その頃にはすでに玄賓開創伝説があった可能性を述べる。また、湯川寺でも聞かれた鍾乳石の伝説や他の伝承などからも両寺のつながりを指摘する。四王寺の場合もやはり玄賓開基を説く略縁起や伝説が存在し、その伝説資料によれば、玄賓が四王寺まで辿つたとされる道筋が弘法大師の通り道とも重なることから、氏は備中国の玄賓開基を伝える諸寺院を結ぶ古道について考える必要性を説くのである。同様のことは第六章でも述べているが、これらはまさしくフィールドワークから導かれた成果であろう。玄賓伝承の背景には、恐らくそれらのルートに沿って、先行する文

献伝承や弘法大師伝説などとの交錯が考えられるのではないか。

第四章では寛文十二年（一六七二）成立の「湯川寺縁起」を取り上げ、本文について逐一検討を加え、その元となる文献について大凡『元亨釈書』（これを原拠とする別文献Xを想定）『発心集』『古事談』『閑居友』、謡曲「三輪」などを比定している。それらは概ね首肯できるところであるが、評者はそこに『撰集抄』をも考慮すべきかと考える。実は『撰集抄』には独立した玄賓説話が一話もないにもかかわらず、その本文には玄賓作と伝える和歌を組み込んだ文章表現が各所に散見するといった特徴が見られるのであるが、そのことが湯川寺縁起の成立過程に何らかの影響を与えてはいないかと推測するのである。一例を示せば、原田氏が縁起に附したBの部分で、玄賓が三輪山の辺に庵を結び、僧都の宣下を辞して詠んだとする「三和川の清き流れにすゝぎてし衣の色をまたは穢さし」の歌の傍線部が『発心集』や『古事談』では「衣の袖」となっているのに対し、『撰集抄』巻一第八話・巻二第四話の表記では「衣の色」（近衛本Ⅱ岩波文庫）とあるのである。『撰集抄』諸本における異同は見られない。また巻五第一話は玄賓と同様、山階寺の智者で唯識を明らかにした永眼大僧都が世を背き、信濃国に隠遁する様を「玄賓のむかしの跡に露もかはる事侍らず。山田を守るゝ、わざはいかゞ侍りけん。つぶねとなりて人にしたがひ、みなね棹さして人をわたす営みは、めづらかなる事にも侍らざりけるとやらん」と称揚する。これなどは縁起のC・D・Eの部分に重なってこよう。尤も『撰集抄』の表現

がそのまま縁起に影響を与えているという意味ではなく、少なくとも近世における縁起製作者の教養と知識の中に素材の一つとしてあったのではないかと思うのである。

第五章は四王寺の文物について述べる。本寺は古刹でありながら幾度かの火災のために旧記がほとんどなく、わずかに大正十年、三十三世勝住がまとめた「当山重要記録綴」ほかが残されているとのこと。しかしそれも玄賓開基伝承については『元亨釈書』の書き抜きであるとするが、わずかに残された年譜・文物の精査から、第三章で既述したように本寺もまた湯川寺を中心とする玄賓隠遁地伝承圏に属する寺院であるとする。

第六章では高梁市中井町にある定光寺、光林寺、光林寺の鎮守とされる柴倉神社にも玄賓と弘法大師にまつわる開創伝説が存在することを紹介する。現在は無住の新見市の湯川寺はこの定光寺の末寺であるという。その中で原田氏が注目するのは明治二十年書写の「柴倉三座神社略史記」に「土地の口碑に徴すれば」とあることで、玄敏僧都（僧）がこの地を訪れ森林の間に靈光の発するを見て草庵を結び本地仏を安置したという、高僧開基を説く奇異なる事績を記していることであり、かつてそのような伝承のあったことを思わせるのであるが、残念ながら今日それを知る人はいないとのことであった。

第七章では、玄賓が草庵を結んだと伝える高梁市落合の千光山松林寺や近くの「玄賓谷」について述べる。松林寺には「玄賓旧跡地」の石碑もある。江戸末期以降の文献資料の内、『備中誌』

所収の「川上郡近似（おおよそ）」にある玄賓谷の記述から、当時、湯川寺とともにこの玄賓谷が、玄賓作と伝える「浅くとも外にまた汲む人ハあらし我に事たる山の井の水」（「山ノ井ノ歌」）の詠まれた名蹟として知られていたと推定する。氏の報告にある「玄賓の湯」という伝説では湧き水とあり、それはまさにこの「山の井の水」を指すようである。和歌は確かに山野で隠遁生活をする玄賓を彷彿させるものではあるが、玄賓作とする確証はない。ただ、これに關しては、時代を遡れば類歌と思しき歌が『後撰和歌集』卷十六雜二に「読み人知らず」として（詞書）山の井のきみにつかはしける（歌）おとにのみききてはやまじあさくともいざくみてん山の井の水」と出ており、『大和物語』一五五段にも類似を思わせる「山の井の浅くは人を」という歌が見える。また「山ノ井ノ歌」とほぼ同じものが江戸初期の沢庵和尚の伝承歌としても見出せるのである。その他、仏教説話集などに記された有名な玄賓説話の類も取り込まれており、やはり江戸末期においてこのような伝承をまとめるだけの見識と知識、文獻的素養を持った人物が思われるのである。また、当地域の伝説として、万人の幸福を願って彫った玄賓自作と伝える「玄賓土仏」の話や、池の水に自らの姿を映して彫ったという「玄賓僧都木像」の話なども伝えられている。これらの話からは、やはり玄賓を温かく迎え入れた土地柄が伝わってくるようである。さらに本章では二つの地名由来伝説についても論じている。一つは玄賓が当地へ来て袈裟を脱ぎ、大石に掛けたので「袈裟掛」という地名が残ったという

もので、写真を見ると大石の表面に筋が残っている。また、高梁へ出る旧道のほとりの岩に玄賓の通った足跡があると言う。今一つは「僧都」という地名由来で、玄賓が薬草の知識を教えてくれたとか、僧都川あるいは僧都と称する湧き水が自分たちの実生活と深く関わっていることを語っているのである。生きた伝承がそこには感じ取れるようである。

第八章では玄賓終焉地伝説を掲げる。原田氏は、玄賓の没年については諸種の文献で明らかであるのに、亡くなった場所についてはどの資料にも記されていないという。ところが氏の調査によれば、小田郡矢掛町<sup>やかけ</sup>小林の玄賓庵跡周辺において終焉伝説が語られ、玄賓の墓とされる五輪塔があり、玄賓がこの地に草庵を結んだ後、そこで亡くなったので「僧都」という地名になったと伝えているのである。五輪塔の前には矢掛町教育委員会による「玄賓塚」と記された説明板があるが、氏の調査では五輪塔のことを「玄賓塚」と呼ぶ話者は一人もおらず、「僧都の墓」「玄賓の墓」「玄賓庵跡」と呼び、中でも「僧都の墓」と呼ばれることが最も多かったと指摘する。しかも家族でよくお参りをしたとも語っているのである。五輪塔を身近で見守って来た人々と行政とのささやかな乖離が残念ながら、ここにも見られるようである。そのほかにも「玄賓と農具」「玄賓と薬草」「玄賓と倉見池」といった、人々の生業と密接に関わり、玄賓を恩人と称える伝承が見出されるのであった。ところでこの玄賓庵は、その北方にある高峰山大通寺<sup>だうつうじ</sup>の末寺であったことがあるらしく、江戸期成立とされる

大通寺蔵の『寺社御改帳』にその名が記されていることから、原田氏は、江戸時代にはこの地域に玄賓僧都伝説が確実に存在していたと見ている。

すでに紙数を費やし、「大和国（奈良県）・伯耆国（鳥取県）編」に触れる余裕がなくなつたが、思い付くまま簡単に触れておきたい。第一章は大和国三輪における玄賓伝説について述べるが、ここでは謡曲「三輪」を取り上げ、謡曲作者が十五世紀当時知られていた玄賓の説話や歌を最大限活用し、三輪流神道説を背景に玄賓と三輪明神との話を創作したとし、やがて玄賓三輪隠棲説話が時代とともに増補改変され、より具体的に新たな発展を遂げたとして近世地誌類や縁起の検討に及ぶ。その中で十八世紀成立の『大和名所図会』には檜原谷<sup>ひのくわ</sup>（玄賓谷）の「玄賓庵」や「衣掛杉」が三輪の名所として紹介されているとする。また、桜井市の玄賓庵に伝わる縁起「玄賓庵略記」でも、玄賓が大僧都に任じられると「とつ国は」の歌を残して檜原の地を去り、越路で渡し守になったり他郷に身を隠したといった独自の記述をしているという。このような畿内における中世から近世に至る玄賓伝承の変化についても氏の視点はゆるぎないものがある。

第二章は伯耆国会見郡<sup>あきふみ</sup>の、玄賓建立と伝える阿弥陀寺を取り上げるが、主として文献を中心にその所在の検証を進めており、玄賓の動向についても具体的な伝説伝承の提示がないので、評者はこのあたりで筆を置くこととする。ただ、本章の大半を使い、文献等による手堅い論証から、阿弥陀寺が伯耆賀祥（鳥取県南部町

賀祥）に建立されたとする結論にほぼ至ったことは玄賓傳承を考える上でも大きな前進であらう。

最後に、評者の関心に引き寄せ過ぎた書評になつてしまつたことを著者に詫びねばならない。それにしても聞き取つた伝説すべてを逐一丁寧に分析し、論を展開していくといった手法は、これまでフィールド調査を重ねてきた評者にとつても斬新なものであり、それゆえに根気のいる大変な作業であつたと思う。原田氏の二十年の歳月をかけた労作から確かに言えることは、従来の玄賓像を超えるものが氏の調査研究から見えて来たこと、そして伝説が単なる知識ではなく、まさしくその土地に玄賓とともに生きてきた人々にとつての真実であり、存在証明でもあるということである。そこにこそ本書の価値の一端があるであらう。

（法蔵館 平成三十年六月 二八〇頁 本体価格二、六〇〇円）

（まつもと・こうぞう）